

ドイツのラジオ放送における音楽番組への 第二次世界大戦勃発の影響

佐藤 英

序

ドイツ軍がポーランドに侵攻した1939年9月1日に、ドイツでラジオの番組に耳を傾けた人は多かった。ベルリン市民のギュンター・グロスマンもその一人で、朝7時に朝の音楽を聴くためにラジオのスイッチを入れたところ、ヒトラーが演説をしているのを耳にしたという¹。この回想は、この日にラジオで伝えられた番組のうちで、ヒトラーの演説が強烈な印象を生み出したことを示している。その後ドイツは6年間に及ぶ戦争と敗戦、国家の分裂という激動の時代を経験するだけに、その契機となった日にラジオで流されたヒトラーの声はドイツ人にとって消し難い記憶となったのである。しかし、この日にドイツのラジオで放送されたのはヒトラーの演説や戦争に関連した報道だけにはなかった。番組の大部分を占めていたのは音楽で、この状況は開戦後もしばらく続いていた。

開戦後のドイツのラジオ放送のプログラムについては、ドイツ連邦文書館(Bundesarchiv)に保存されているドイツ帝国放送協会関係の資料のうち、ドイツ帝国放送指導部(Reichssendeleitung)と各地方局の間で交わされていた膨大な量の交信文書を精査することで、その概要を知ることが可能である。だがこの文書は、先行研究を見る限り、これまで本格的に調査されてこなかったように見受けられる。そこで本稿は、この交信文書に含まれている音楽放送に関す

る資料を用いながら、第二次世界大戦が勃発する前夜から開戦後約1か月までの音楽番組について考察を行うものとする。今回のリサーチで特に着目したのは、ラジオ放送のプログラムがどのように計画されていたか、そのプロセスを可能な限り明らかにすることである。音楽番組がプロパガンダとして持ち得る意味について考察するための材料が得られることも期待できるからだ。

本稿では、以下の手順で検討を行う。

第1章では、1939年9月上旬にニュルンベルクで予定されていたナチス党大会の前夜祭の放送計画を取り上げる。この時はワーグナーの《ニュルンベルクのマイスタージンガー》(以下、《マイスタージンガー》とする)の上演が予定されており、この中継放送を巡って約1か月前から帝国放送指導部と地方局との間で頻繁にコンタクトがとられていた。最終的にこの公演は開催直前に中止と決まったため、放送も行われなかった。だが、番組編成の計画性という観点では重要な情報を示してくれるプログラムと言える。放送の現場における平時のプロセスが示されると同時に、戦争の準備が始まってくることでその影響も垣間見せるからである。第2章では、戦争開始前にポーランドの音楽について規制が始まっていたこと、また開戦当日の音楽番組の放送内容について前日までにプランができていたことを示す。ここで引用した9月1日の番組編成表は、本稿において初めて世に出るものと思われる。この資料のほか、ラジオ放送情報誌に掲載されていた、開戦が無かった場合に予定されていた番組との比較検討を行うことで、音楽番組が重視されていたという最終案の特殊性が浮かび上がることになる。第3章では、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団がゲッベルスの指示で行った放送コンサートのシリーズを取り上げる。出演者との交渉や演目の選定に関しても、様々な資料を基にその過程が示される。最終章では、以上の事例を踏まえ、この時期にラジオにおける音楽番組が果たした役割について考察する。これにより、グロースマンの回想にあるように、国家の有事を伝える指導者の声により背景と化してしまっただけに見える音楽も、プロパガンダの一環として動員されていたことが明らかになるはずである。

1. ニュルンベルクにおけるナチス党大会での《ニュルンベルクのマイスタージンガー》の上演とそのラジオ中継の計画

1939年のニュルンベルクにおけるナチス党大会の予定は、この年の7月11日に新聞で発表された。期間は9月2日から11日までである²。8月に入ると、恒例となっていた前夜祭のワーグナーの《マイスタージンガー》の上演がクレメンス・クラウスの指揮で行われると告知された³。

この公演のラジオ中継に関しては、この年の8月になってからベルリンの帝国放送指導部と地方局と間でコンタクトが始まっている。そうした事例の最初期のものの一つは、同年8月9日に帝国放送ブレスラウ局から帝国放送指導部に打電された文書である。質問の内容は、《マイスタージンガー》の中継放送に必要な費用だった⁴。この2日後の8月11日にはシュトゥットガルト局⁵、さらにその翌日にはハンブルク局もこのオペラの中継放送に興味があると伝えている⁶。この時点では、帝国放送指導部でもこの番組の地方局での扱いについて方針が固まっていなかったようだ。8月12日にベルリンからブレスラウ局に別件で回答があった際、《マイスタージンガー》はドイツ放送(Deutschlandsender)のみの番組だが、地方局も自由に中継できると伝えられた⁷。ところが、8月14日に全放送局に対して送付された電信文では、このオペラの中継局の数には限りがあるため、それを予定している局はその旨を早急に報告することが求められている⁸。この情報の食い違いは、12日のブレスラウ局への回答は内々のもので、14日の全放送局への告知までに方針の変更があったことをうかがわせる。実際のところ、このベルリンからの情報の食い違いによると思われる混乱があった。8月19日、ブレスラウ局は、12日に地方局が自由に中継できると情報を得ていたためであろうが、中継費用は帝国放送指導部の負担であることの確認がほしいと伝えている⁹。ただ、この交渉では何らかの問題が起きたようで、ブレスラウ局が放送できたのは《マイスタージンガー》の第1幕だけだった¹⁰。

8月14日に全放送局宛にドイツ放送によるニュルンベルク党大会のラジオ放

送予定が伝えられた後、まずはウィーン局が9月上旬の放送予定を報告する文書で、《マイスタージンガー》全曲の放送を示唆してきた¹¹。8月15日にはケーニヒスベルク局も、休憩時間のプログラムを含めて中継放送することを報告した¹²。ライプツィヒ局は、9月の放送予定番組の報告であらためてオンエアを告げるだけでなく¹³、すでに8月8日にこの件は伝えてあったというリマインドも送っている¹⁴。8月18日、ドイツ放送は申し出のあった局に対し、ミュンヘンから当日の段取りを受け取っていないため、まだ情報を提供できないと回答した¹⁵。この後、ザールブリュッケン局からも、放送を中継したいという希望が寄せられた¹⁶。最終的に中継局は、全国放送のドイツ放送、地方局ではベルリンとケルン以外の全局、すなわちウィーン、ミュンヘン、ザールブリュッケン、ライプツィヒ、フランクフルト、ハンブルク、ベーメン、ケーニヒスベルク、シュトゥットガルト、ダンツィヒ（以上、全曲放送）、ブレスラウ（第1幕のみ）となった¹⁷。先に、番組の中継局には限りがあると伝えられたことを述べたが、最終的にほぼすべての地方局が中継を予定したことから推測するに、ナチスの重要な行事の中継放送の際に個々の放送局に競わせるように名乗りさせるということが重要だったと考えられる。このシステムが機能すれば、帝国放送指導部のイニシアチブを強化できるからである。この中継放送の実施をめぐる動向は、最終的に1940年夏に実現される地方の各局（Reichssender）の番組の統一化を目指すプロセスの一環であった可能性が指摘できる。

さて、ドイツ放送では当日の段取りが具体的に決められていった。8月17日の案では、ドイツ放送が、第1幕の後の休憩でワーグナーと《マイスタージンガー》について、作品の器楽演奏を交えながらの談話、第2幕の後の休憩でニュースとニュルンベルクからの報告をするとされていた。8月19日には追加と若干の修正があり、ドイツ放送は17時45分からオペラのあらすじ、1幕と2幕の間の休憩ではカール・ゼーレの著作からの朗読と第2幕のあらすじを放送する予定で、ミュンヘン局には第2幕と第3幕の休憩時間を担当してもらいたいとの依頼が出された。しかし、8月21日に全放送局にあてて送付された文書では、休憩中のコンテンツは最初の案に戻されている。当日のスケジュール

（第1幕：18時から19時25分，休憩：19時25分から19時52分，第2幕：19時52分から20時52分，休憩：20時52分から21時34分，第3幕：21時34分から23時34分頃）と主要キャスト（ハンス・ザックス：ルドルフ・ボッケルマン，ファイト・ポグナー：ヨーゼフ・フォン・マノヴァルダ，ジクストゥス・ベックメッサー：オイゲン・フックス，ヴァルター・フォン・シュトルツィング：セット・スヴァンホルム，エーフェ：ティアナ・レムニッツ，マグダレーナ：ルート・ベルグルンド，ダーフィット：エーリヒ・ツィンマーマン，ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団，指揮：ヴィルヘルム・フルトヴェングラー）が伝えられたのもこの文書である¹⁸。この公演で演出を担当したルドルフ・ハルトマンについては，8月21日の時点では姓のみが伝えられるにとどまったため，8月25日に正確な姓名がベルリンから各局に打電された¹⁹。

主要キャストを報告する文書に記されていたように，最終的に指揮者はクラウスではなく，フルトヴェングラーとなった。この決定には，ヒトラーやゲッベルスの意向が反映されたようだ。クラウスが《マイスタージンガー》の指揮者として公表された時，出演するオーケストラは言及されていなかった。オーケストラの件が発表されるのは8月16日の『フェルキッシャー・ベオバハター』紙においてである。ヒトラーの強い希望でウィーン・フィルの出演が決定し，それに伴いこのオーケストラが出演中のザルツブルク音楽祭の公演も日程が変更されると報じられた。この影響があったのは音楽祭終盤の公演で，9月1日の午前中にはヴェルディの《レクイエム》（当初は9月3日の予定だった），同日夜にはヴェルディの《ファルスタッフ》，9月2日と3日にはシェイクスピアの『空騒ぎ』が上演されることになり，9月3日のリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》は中止となった²⁰。見逃してはならないのは，8月16日の発表の時点で出演者としてフルトヴェングラーの名前が公表されていないということである。彼のコンサート情報は注目の的で，例えばこの年の10月に予定されていたウィーン・フィルとのドイツ国内演奏旅行も，8月24日の『フェルキッシャー・ベオバハター』において早々と発表されている²¹。ニュルンベルクの党大会というナチスの看板行事，それも前夜祭の《マイスタージンガー》にフルトヴェングラーが出演となれば大きな話題となるはずだが，8月

16日の記事に彼の名はない。この時点では、フルトヴェングラーの出演が決定していなかったと考えるのが妥当である。

戦争開始も視野に入っていたはずのこの時期にヒトラーが何を思ってウィーン・フィル出演を要求したか、その理由については伝えられていない。彼はザルツブルク音楽祭を訪問し、8月9日にはクラウスの指揮でモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》、8月14日にはカール・ベームの指揮で《後宮からの誘拐》の演奏に接している²²。この2つの公演がヒトラーに何らかの思い付きをもたらした可能性がある。これらの公演でオーケストラ・ピットに入ったのはウィーン・フィルだった。また、他ならぬこのオーケストラがこの前年のニュルンベルクの党大会に客演し、ヴィルヘルム・フルトヴェングラーの指揮で《マイスタージンガー》を披露して大成功を収めていた。その際にヒトラーは、このオーケストラを毎年、ニュルンベルクに連れてくるという希望を述べていたのである²³。ただし、いくつかの先行文献で指摘されているように²⁴、フルトヴェングラーとウィーン・フィルが1939年のニュルンベルクにおける党大会で《マイスタージンガー》を演奏することが既定路線として決定していたということは、事実と反しているのではないだろうか。先に見たように、当初の発表では指揮者はクラウスだったし、ウィーン・フィルの出演に関しても、もし党大会への出演が予定されていたならば、ザルツブルク音楽祭の日程もあらかじめそれを踏まえて組まれていたはずだからである。

ニュルンベルクにおける党大会へのウィーン・フィルの出演、さらにはフルトヴェングラーの出演が決まってくるのは、この年の8月にフルトヴェングラーとゲッベルスが会談したことと関係があるように思われる。ゲッベルスの日記からこの日付を特定することはできないが、フルトヴェングラーがウィーン・フィルのメンバーであるオットー・シュトラッサーに送った同年8月2日と12日付の2通の手紙から、主たる案件はこのオーケストラが自主的に指揮者を選び出すという運営制度に関するものだったことがわかる。フルトヴェングラーはウィーン・フィルの一切の演奏会の指揮から降りることを仄めかしながらゲッベルスに迫ったが、提案は却下された²⁵。その後、フルトヴェングラー

は8月17日にもゲッベルスと会う機会を得ている。このとき彼は、宣伝相の音楽部門長だった指揮者ハインツ・ドレヴェスがウィーン・フィルを指揮した件で、再び辞任をちらつかせながら異議を申し立てに来た。結局のところ、フルトヴェングラーはゲッベルスに言い負かされ、「最後に彼はひどく小さくなって」帰って行ったという²⁶。件の《マイスタージンガー》の指揮者が8月16日の『フェルキッシャー・ベオバハター』では言及されなかったものの、8月21日の放送局の情報では確定していたことから推測するに、フルトヴェングラーの出演は8月17日のゲッベルスとの会談で決まった可能性が高い。

こうした様々な交渉により、ニュルンベルクにおける党大会での《マイスタージンガー》の上演と放送が計画されたものの、8月26日にこの年の開催は中止と決まった²⁷。《マイスタージンガー》の放送についての文書が交わされていた日付を改めてみると、8月21日までに放送計画の概要がほぼ出来上がっており、この時点で不備があった演出家の名前については8月25日にベルリンの帝国放送指導部から各放送局に情報が送られている。この事実を素直にとらえれば、放送局は中止が告知される前日までこのオペラを中継するものとして準備を進めていたことになるだろう。だが、8月21日までは《マイスタージンガー》の中継を巡って連日のようにコンタクトが行われていたにもかかわらず、演出家の正確な姓名という些細な事項を各局に伝えるまでに4日も要していることに着目すると、放送関係者では党大会の開催を疑問視する向きが多く、情報発信にためらいがあったとも解せよう。

2. 開戦に向けて——シヨパンの放送禁止と9月1日の番組案の作成

ニュルンベルクにおける党大会の開催を危ぶむ要素は、8月22日に放送関係者にも伝えられていた。事の発端は、この日の午前中、国防軍のエリートがヒトラーの演説を聞くために召集されたことにあった。演説はポーランドへの侵攻に関するもので、昼休みをはさんでさらに1時間も続いた²⁸。これを受けて、放送局でもその準備が始まっている。この日の16時には、ドイツの全放送局に

宛てて、各地方局の責任者は昼夜を問わず放送局に留まって電話連絡がつくようにしていること、また、電信の業務担当者も24時間常駐することが指示された²⁹。

ポーランドへの進軍を見据えた一連の動向の中で、音楽放送に関する規制も行われた。問題となったのは、ポーランドの作曲家フレデリック・ショパンの扱いである。先の2通の電信が送付されたのとほぼ同時に、以下の文書も全放送局宛に極秘扱いで打電された。「ショパンは、ドイツの放送局の番組の中で、制約を設けてのみ考慮されるべきである。あまり強調されてはいけない。生涯を述べたり、彼のポーランド国籍を示唆することはあってはならない」というのである³⁰。同様の指示が1939年12月に帝国放送シュトゥットガルト局から送られた番組案に対しても出されているところから、ドイツでショパンの音楽の放送規制は長い期間に及んだと思われる。

帝国放送指導部からの指示としてショパンの音楽の放送禁止が伝達されたのは、その音楽のもつ性格によるところが大きいように思われる。参考にしたいのは、第二次大戦開戦の時分にコンラート・ミュラーなる人物が執筆した「ポーランドと音楽」という記事である。ここで示された見解はこうだ。「創造的な音楽家」が「乏しい」ポーランドにおいて、ショパンは「唯一傑出した個性」で、特に成功したのはマズルカやポロネーズと言ったポーランド固有の舞曲だった。ただし、ショパンの音楽にある「過度の感傷さ」は「我々ドイツ人」には「異質な」もので、「英雄的なもの」に傾倒してゆく性格が欠けている。例えば、ショパンの《ピアノ・ソナタ第2番》の〈葬送行進曲〉とワーグナーの《神々の黄昏》の〈ジークフリートの葬送行進曲〉を比較すると、ショパンの音楽には「陰鬱な悲劇性」や「慰め」はあるものの、ワーグナーとは対照的に、「人間を高める運命」を何一つ感じさせないというのだ³¹。

この記事で注目したいのは、ショパンがポーランドを象徴する音楽家という評価を受けていること、また、その音楽に運命を切り開く強い意志が欠如していることが指摘されていることである。前者については、先の放送に際しての注意にもあるように、ショパンの音楽に備わった国民主義的性格が問題である

ことは、改めて言うまでもないだろう。しかもそれは、突き詰めればナチスにとって不都合を招き得る「危険」を秘めていたのではないだろうか。この約100年前、ショパンの音楽の持つ「危険性」を敏感に感じ取ったのがローベルト・シューマンだった。1836年、シューマンはショパンの2曲のピアノ協奏曲を評した時、彼の音楽の特徴として「極めて鋭い国民性」³²を挙げた。シューマンは、1830年の11月蜂起がロシアに弾圧されて失敗し、多数のポーランド人が難民となってドイツに流れ込んでくる現実を目の当たりにするうちに、故郷を逃れたショパンに深い同情を抱き、その音楽に対してもそうした心情から積極的に評価することを試みていた³³。それだけにシューマンのショパン批評では、その音楽に秘められた無言の政治的抵抗にも言及されてくる。「北方の強大な独裁統治の君主が、ショパンの作品、それもマズルカのちょっとした旋律において、どんなに危険な敵が君主を脅かしているかを知るならば、彼はその音楽を禁じるだろう。ショパンの作品は、花々の下に沈められている大砲なのだ」と³⁴。ナチスによるポーランド侵攻より約100年前の文章とはいえ、ポーランドの自立性の喪失という点で同様の状況が生まれていたことを見逃してはならない。シューマンが言語化してみせたショパンの音楽の性格、特に压制された者に対する憐れみの念を抱かせるという側面は、武力をもってポーランドに侵攻しようとするナチスにとって、最も神経を尖らせていたことだったはずである。1939年のミュラーの論説においてショパンの「陰鬱な悲劇性」が指摘されていたことを思うと、彼の音楽が同情を招くというまさにその点において、有事の前に監視下に置かれなければならなかった理由が見えてくるのである。後者の音楽の持つ力強さは、英雄を求めるよう演出することが求められた時代の空気ゆえ問題である。後にベルリン・フィルの番組のシリーズで確認するように、戦争にのぞむ決然とした意志もこの時代の音楽の重要な表現として考えられていた節が認められる。こうした要素とショパンの音楽の感傷性が相いれなかったということなのだろう。

さて、放送関係者の間で戦争開始が間近であることは状況から容易に推測できたはずだが、実際にそれがいつになるか、さらにザルツブルク音楽祭などの

音楽行事の実施と放送の見込みがどうなっていくかについては見通しが得られなかったように思われる。ニュルンベルクにおける党大会の《マイスタージンガー》の放送に関しても、おそらく不確定要素が認められたために、各局間のコンタクトが一時的に停止したものと推測される。9月上旬まで開催が予定されていたザルツブルク音楽祭についても、公演を収録して放送に活用する方策が練られていたものの、これまでとは違う慎重さが求められるようになった。特に問題となったのは、放送が9月以降にずれ込む可能性のあるコンテンツだった。注目したいのは、8月27日と8月30日に帝国放送ミュンヘン局に出された指令である。その内容は、8月27日のモーツァルトの《ドン・ジョヴァンニ》(クレメンス・クラウス指揮, ウィーン・フィルほか), 8月28日と8月31日のヴィレム・ヴァン・ホーフストラテン指揮, ザルツブルク・モーツァルテウム管弦楽団によるモーツァルト・コンサート, 8月30日昼のヴィレム・メンゲルベルク指揮, ウィーン・フィルのコンサート, 同日夜のヴェーバーの《魔弾の射手》(ハンス・クナッパーツブッシュ指揮, ウィーン・フィルほか), 9月5日のロッシーニの《セビリアの理髪師》(トゥリオ・セラフィン指揮, ウィーン・フィルほか), 9月6日のリヒャルト・シュトラウスの《町人貴族》(オーケストラ・コンサートの一部と思われる), 9月7日のエトヴィン・フィッシャーのピアノ・コンサートを録音盤(ヴァックスディスク)で2枚ずつ, 収録するというものだった³⁵。この計画が通常と異なるのは、録音盤の扱いである。当年の8月中に開催されていた放送の事例を見る限り、ザルツブルク音楽祭の様子は各放送局に送信され、必要に応じて録音盤に収録されていた。これ以前の公演ではディスクの作成部数に関してベルリンから指示は出ていない。各放送局での放送回数を見る限り、録音盤の音質が保証できる1回にとどまっていることから、各放送局で1組というのが原則であったと思われる。ちなみに、複数回の再生に耐える長期保存用の録音を作成するためには、ヴァックスディスクをレコード会社に送付してシェラックでプレスする——つまり、商業用の78回転のSPレコードと同じ素材のディスクを作成する——という工程を踏む必要があった³⁶。ところが、1939年8月末からのザルツブルク音楽祭に関しては、ミュンヘン局

には個々の催しに対して2組の録音を作成することが要求されている。このことが意味するのは、コンサートの収録は行うものの、放送の機会がいつになるかわからないため、状況に応じて様々に対処できるよう、録音盤のスペアが作成されたということである。もっとも、8月30日のメンゲルベルクのコンサートは指揮者のキャンセルにより開催されず³⁷、9月1日には音楽祭自体が「技術的な諸事情により」中止と決まったので³⁸、この収録計画の一部は実現せずに終わった。収録された音源は、《ドン・ジョヴァンニ》を例にすると、1939年11月26日の帝国放送ミュンヘン局で9時35分から放送されている³⁹。音楽祭が終わってかなり時間が経過してから、2組作成されたディスクの1組が番組で使用されたことになる（もう1組の録音の使用は、まだ確認されていない）。

開戦に向けて様々な準備が行われる中、開戦当日の番組についても検討が重ねられていた。この件については、8月31日の午後から、頻繁にコンタクトが取られるようになる。帝国放送ライプツィヒ局はこの日の16時45分に帝国放送協会の音楽部門の責任者の一人だったフリッツ・ガンスに宛てて、翌日の朝の最初の音楽番組について放送予定を報告している。それによると、朝6時から、オットー・フリッケ楽団によるヨーゼフ・ノイホイザーの〈ヴェストヴァルト行進曲〉ほか16曲の行進曲、7時10分からはゲルハルト・パルマン指揮の砲兵連隊第5中隊の演奏による軍歌の番組「国防軍は歌う」の第65回「兵士になることはなんと素晴らしいか」で〈リッペ・デトモルト〉ほか10曲を放送するとの報告があった⁴⁰。この時間の全国放送の番組は、当初、6時から「モーニングコール、天気」、6時10分からスポーツ、6時30分から8時までケーニヒスベルク局の吹奏楽演奏の中継（7時にニュースで一時中断）が予定されていた⁴¹。これらのすべてが上述の番組に変更されたのである。放送が決定した番組では、事前に収録されていた録音盤が活用されたようだ。6時からの番組では個々の曲の演奏時間が示されているし、この演奏曲目の報告に先んじて打電された文書によると、7時からの番組は録音盤に収録済みであると明言されているからである⁴²。実際のところ、後者の番組は同年8月29日の20時15分から21時に帝国放送ライプツィヒ局で放送されたものと同じの内容だった⁴³。イエルク・ク

レーメンも指摘するように、「あたかも9月1日の国防軍のポーランド侵攻がライプツィヒのラジオにおいて音楽で先取りされていたかのような」印象を与えるほど、この年の夏から帝国放送ライプツィヒ局では行進歌などの軍歌の番組が増えていた⁴⁴。こうした前段階があったからこそ、9月1日の早朝からの対応が短時間のうちに可能になったと思われる。

9月1日の全国放送の番組は、放送前日の夜には内容が決定した。8月31日の22時8分、帝国放送協会からドイツ全域の放送局に対し、ドイツ放送での放送予定を予定している番組の一覧が送信された。以下がその番組で、地方局は必要に応じてこれらの番組を中継することが許された⁴⁵。なお、20時と22時から15分ないし20分間、情報の脱落が認められるが、これはニュースの時間であったと思われる。

6時から8時	ライプツィヒから 行進曲と軍歌
8時から10時	ベルリンから 小編成のオーケストラによる演奏
10時から11時	ケルンから ブラスによる演奏
11時から12時	フランクフルトから 室内楽と合唱
12時から14時	フランクフルトから 正午のコンサート
14時から16時	ベルリンから ランブール楽団の演奏
16時から18時	ハンブルクから 午後のコンサート (アドルフ・ゼーカー指揮の大オーケストラ)
18時から18時45分	ベルリンから 歌曲とピアノ曲
18時45分から20時	ベルリンから 吹奏楽と軍歌
20時15分から22時	ベルリンから 帝国放送ベルリン局大管弦楽団の演奏 (ハインツカール・ヴァイゲル指揮)
22時20分から23時	ベルリンから 夜の小品
23時から1時	ベルリンから リビショフスキ楽団の演奏
深夜1時から3時	ベルリンから レコード放送

最終案の番組編成の特徴と言えるのは、定時のニュース以外、すべてが音楽になっているということである。ラジオ情報誌の予告を見ると、この日のドイツ放送の番組編成は、8時から9時は放送休止、9時から9時40分までは法定休止の時間、9時40分から体操の時間、10時から10時45分まではケーニヒスベルク局からバルト海の沿岸漁業についての報告、15時30分から16時までは女子の職業選択に関する教育番組、18時45分から19時までヴェネツィアの映画俳優展覧会の報告、19時から19時15分までニュルンベルク党大会に関する番組、21時15分から22時までは「予備役軍人の時間」など、音楽以外のコンテンツが多数含まれていたが、こういった一切が姿を消したことになる。また、音楽についても、12時からのフランクフルト局の「正午のコンサート」は、当初、ザールブリュッケン局の番組とされていた⁴⁶。朝のライプツィヒの番組と同様に、帝国放送指導部からの指示により、音楽番組の担当変更についても指示が出されていたことを物語っている。おそらく「正午のコンサート」も、文書によって詳細が確認できないとはいえ、音楽番組の個々の作品に至るまで綿密に段取りが決められていたのだろう。このような音楽をメインにした番組が編成された理由として、ニュースなどの戦争関係の情報を随時放送できるようにするための措置が指摘できる。9月1日の場合、5時48分に全放送局に宛てて、ヒトラーからの国防軍に向けての声明のスク립トが送信されている。この声明は朝6時に特別ニュースとしてラジオで放送され、7時、8時、10時にも繰り返された⁴⁷。

9月2日以降も、予定されていたドイツ放送の番組は大幅に変更された。9月1日の番組と同様に、全国放送は各放送局が担当する音楽番組の持ち寄りとなり、ニュースも随時伝えられたのである。ただし、音楽番組の内容に関しては、ラジオ週刊誌で予告されていたコンテンツがそのまま放送されることはなかったようだ。ドイツ放送の番組は放送前日まで編成が確定しないことが続いた⁴⁸、ラジオ情報誌では9月10日から16日までの間は同局の番組予定表の掲載が見送られている⁴⁹。この時期に地方局の独自性がどの程度保たれていたかについては判断が難しいが、少なくとも9月初旬は予定通りに放送できなかつ

た可能性が高い。例えば、9月6日の20時15分から帝国放送ウィーン局の「イタリアの巨匠」という番組で、ザルツブルク音楽祭におけるトゥリオ・セラフィン指揮ウィーン・フィルのコンサートが録音で放送されることが、2日前と前日の『クライネ・フォルクス・ツァイトウング』で予告されている⁵⁰。しかし、この番組は放送できなかつたと考えられる。同紙では放送予定日の9月6日からからしばらくの間、番組表が掲載されておらず⁵¹、他の新聞ではこの日の放送内容は「アナウンスで告知」と記されている⁵²。当該の出演者による番組は9月25日の新聞にあらためて放送予定が掲載されていることから⁵³、この時まで延期になったのだろう。

3. ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団による特別放送シリーズ (1939年9～10月)

戦争は始まったものの、ナチスはドイツ国内での音楽や演劇の催しを通常通りに運営することを原則とした⁵⁴。先にニュルンベルク党大会の《マイスタージンガー》やザルツブルク音楽祭の9月の全公演が中止となったという事例を挙げたが、むしろこれは例外で、例えばベルリンでは9月1日にフォルクスオーパーにおいて、カール・メラウの新演出によるワーグナーの《マイスタージンガー》の公演が行われた⁵⁵。ミュンヘンのバイエルン国立歌劇場では、ミュンヘン音楽祭 (Münchener Festspiele) の一環として、9月3日にはリヒャルト・シュトラウスの《ばらの騎士》、9月5日からは「イタリア祝祭週間 (Italienische Festwoche)」と題してヴォルフ＝フェラーリの《4人の田舎者》(9月5日と8日)、プッチーニの《トスカ》(9月6日)、ヴェルディの《ドン・カルロ》が、いずれもクレメンス・クラウスの指揮によって上演された⁵⁶。一方、この時期のラジオ放送の番組に関しては、それ以前と比較して性格を変えることになった。1939年8月には、バイロイト音楽祭やザルツブルク音楽祭の放送が頻繁に行われ、クラシック音楽の第一級の演奏家による番組が連日のように放送されていた。すでに述べたように、当初の予定では9月以降もそうし

た番組が続くことになっていたが、これらは放送計画から消えた。特に9月上旬は、ドイツ放送のクラシック音楽の演奏は主に放送オーケストラが担い、スター級の演奏家も番組に起用されることはなかった。

このような状況の中で、9月11日から開始されたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団によるラジオ番組シリーズは、ひととき目を引くものになった。これは、ゲッベルスからの要請で実施された⁵⁷。基本的なコンセプトは、「週3回、ドイツの偉大な巨匠たちの作品」を取り上げることで⁵⁸、クレメンス・クラウスの指揮による10月3日の最終回まで⁵⁹、放送回数は全部で11回を数えることになる⁶⁰。このオーケストラの新シーズンが本格化していなかったこと、また戦争開始に伴う士気高揚が目的とされたことで、頻繁に演奏が披露されたものと思われる。

この放送の全容については先行研究で示されていないため、以下に判明した限りでリストアップを試みた。演奏曲目は、各放送局に打電された文書からは第10回と第11回のみが特定可能で、ほかの9回分については、他の資料から特定できたものを記した。

第1回 9月11日 20時から21時15分 カール・ベーム指揮⁶¹

ブラームス：交響曲第1番，ベートーヴェン：《レオノーレ》序曲第3番⁶²

第2回 9月13日 20時から21時 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮⁶³

ヘンデル：合奏協奏曲 作品6-5，ベートーヴェン：交響曲第5番《運命》⁶⁴

第3回 9月15日 20時から21時 ヘルマン・アーベントロート指揮⁶⁵

第4回 9月17日 20時から21時 オイゲン・ヨッフム指揮⁶⁶

*第3回と第4回では、モーツァルト，ベートーヴェン，シューマン，ブラームスなどの作品が放送された（曲目は不明）⁶⁷。

第5回 9月19日 20時20分から21時20分 カール・ベーム指揮⁶⁸
曲目不明

第6回 9月22日 20時20分から21時20分 ヘルマン・アーベントロート指揮⁶⁹
曲目不明

第7回 9月24日 20時20分から21時20分 指揮者, 曲目不明⁷⁰
曲目不明

第8回 9月26日 21時15分から22時 ヨーゼフ・カイルベルト指揮⁷¹
ベートーヴェン: 交響曲第6番《田園》⁷²

第9回 9月29日 20時20分から21時15分 指揮者, 曲目不明⁷³

第10回 10月1日 20時50分から22時 ヴィルヘルム・フルトヴェングラー指揮
ベートーヴェン: 《エグモント》序曲, 交響曲第3番《英雄》⁷⁴

第11回 10月3日 21時15分から22時 クレメンス・クラウス指揮
チャイコフスキー: 交響曲第5番⁷⁵

この番組を放送したのは全国放送のドイツ放送で、地方局は必要に応じてこの番組を流した。10月1日のフルトヴェングラーのコンサートは、「帝国放送の招きによって」スロヴァキアでもオンエアされ、両者の間で「音楽文化の領域で帝国放送との緊密な関係」を築く第一歩となったという⁷⁶。

この番組の企画・運営は開戦後から始まっただけに、準備時間が短く、スケジュール管理や指揮者の確保には相当の困難があったと想像される。初回のベームとの演奏の場合、リハーサルは放送当日に2時間行われただけだった⁷⁷。先の一覧で指揮者が特定できない番組が2回あるのは、全放送局への前日の配

信時刻までに、不確定要素があり、公表できなかったためとも考えられる。最終回のクラウスとの交渉も、放送日の決定までには時間を要した。クラウスにベルリン・フィルの放送コンサートへの依頼があったのは9月19日で、この段階では9月26日の番組への出演が求められていた。だがクラウスは、ミュンヘン音楽祭の後、シュタイヤーマルクで休暇を取っており、電話での連絡もつかない状態だった。1939/40年のシーズンの開幕公演（9月24日の《タンホイザー》）までにはミュンヘンに戻ってくるとしても、シーズンの最初だけに歌劇場の運営に関する重要な案件が山積みになっていた。また、開幕公演に続けて9月28日から30日までオペラを指揮する予定もあったため、彼が提案された日にベルリンへ行くのは難しかった⁷⁸。休暇から戻ったクラウスは、ゲッベルスからの「名誉ある仕事」を引き受けるつもりはあるものの、不在中の仕事を片付けねばならないこと、また、9月26日に実施されるザルツブルク・モーツァルテウムの入学試験に責任者として立ちあわなければならないとの理由で、期日の変更を提案した。ベルリン・フィル側で考えている放送コンサートのシリーズの延長がもし可能であれば、10月3日であれば出演できると言ったのである⁷⁹。先述の一覧に示したように、クラウスは10月3日に出演したことが確認できる。このことから、このシリーズは当初は10回で企画されたものの、クラウスの都合に合わせて最後の1回が追加されたことがわかる。

ベルリン・フィルのラジオ番組シリーズは、指揮者の人選や作曲家を見ると、「ドイツ」を強く意識させるものになった。最終的に決定した指揮者は、ドイツ国内の要職にある人物で占められていた。フルトヴェングラーは1934年12月に「ヒンデミット事件」を期にドイツ国内のオーケストラで最高の格付けを得ていたベルリン・フィルの首席指揮者の地位を辞しているが、その後もこの楽団の重要な指揮者だった。本稿でも見たように、1939年のニュルンベルクの党大会においても、《マイスタージンガー》の指揮を委ねられるなど、ナチスにとって国内外へのアピールに欠くべからざる人物の一人だったのである。そのほかの指揮者については、ベームはザクセン国立歌劇場、ヨッフムはハンブルク国立歌劇場、カイルベルトはカールスルーエ国立劇場、クラウスはバイエル

ン国立歌劇場の、それぞれ音楽監督の任にあった。アーベントロートも、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の常任指揮者だった。

演奏レパートリーも、ヘンデル、モーツァルト、ベートーヴェン、シューマン、ブラームスといった独逸系の作曲家の作品がメインで、クラウスの出演した最終回のチャイコフスキーだけが例外である。この選曲に際しては、この年の8月に締結したばかりの独ソ不可侵条約が意識されたと考えていいだろう。以下の当日の放送アナウンスにおいては、この名曲の誕生の背景にドイツとロシアの双方の文化からの貢献が言及されており、ここに当時の国際情勢の影響を認めることができるのである。「チャイコフスキーは人生の過酷さを経験しました。しかし、そうした過酷さが彼の心を支配することはできませんでした。チャイコフスキーは夢想的に感情の世界へと身を委ねていましたが、しかし、情熱的に人生の美と喜びを告白できる時にはじめて、彼は自分自身になります。この告白する力を、彼はロシアの民族音楽と熱愛するドイツの巨匠たちの手本から得ています。こうしたすべてのことが、交響曲第5番という人気のある作品で最も明確に示されるのです」⁸⁰

演奏された作品の傾向については、全体として戦時にふさわしいものが多いように見受けられる。例えば、ベートーヴェンの交響曲第5番やブラームスの交響曲第1番のように、ハ短調で曲が始まり、ハ長調で曲が終了するという、苦悩を通じての栄光という図式が成り立つような作品が含まれている⁸¹。同様のコンセプトが認められる作品としては、ベートーヴェンの《レオノーレ》序曲第3番と《エグモント》序曲、チャイコフスキーの交響曲第5番も挙げられる。戦争に向かう決然とした意志が音楽においても表現できるものかが重要だったと思われる。ベートーヴェンの交響曲第3番は、雄大な曲想というだけでなく、「英雄」という表題の持つ意味も大きかったのではないだろうか。前章において引用したミュラーの論説で、ドイツ音楽の特質として、「英雄的なもの」が指摘されていたことを思い起こしたい。この「英雄的なもの」をこの当時のドイツで体現するものといえば、総統ヒトラーである。そうしたイメージも選曲に際して勘案されたことだろう。そうすると、曲想が穏やかな

ベートーヴェンの交響曲第6番《田園》はどうだろうか。この選曲は、マイケル・H・ケーターも指摘するように、ナチスの芸術政策では士気を高めるだけでなく、国民をなだめる鎮静剤としての意味も重んじられていたことの現れと考えられる⁸²。

放送された番組は好評だった。ヴィルヘルム・マッテスは、ベルリン・フィルの番組は特筆すべき出来で、前線勤務にある人々にドイツの文化に触れる機会を作るだけでなく、国内での産業従事者にとっても息抜きや活力を得る良い時間となったと評した⁸³。『フォルクスフンク』誌の時評では、ベルリン・フィルの崇高な演奏は全国民にとって「魂と精神の滋養」で、このような最上の演奏は軍事行為と並んでドイツ人の連帯感を高めるものになるとされた⁸⁴。

4. 結びに変えて——問われる音楽の意味

本稿の結びとして、開戦時からドイツのラジオ番組において音楽番組が重要視された理由と、この時代にこのような番組が果たした役割について考察したい。

本稿の第1章で示したように、ニュルンベルクにおけるナチス党大会で上演が予定されていた《マイスタージンガー》のラジオ中継放送は、約1か月前から入念に準備されていた。本稿では紙数の都合で他の番組との比較を示すことができなかったが、実際のところは平時の通常の音楽番組についてもほぼ同様のプロセスが踏まれていた。1時間ほどの番組であったとしても、担当する局から全演奏曲目が事前に報告されていたのである。全体的な傾向として、おおむね1か月前には予定が組まれており、企画が大規模なものについては数か月前に素案が送られるというケースもあった。今回のリサーチで参照した1939年8月の帝国放送指導部と地方局の交信記録には、この年の11月に予定されていた帝国放送ウィーン局の音楽番組の放送案も含まれていた。このように見えてくると、《マイスタージンガー》の中継放送に関して中継の起点局と帝国放送指導部の間で行われた連絡は、手続きとしては通常の番組とは基本的に同じとい

うことになる。他の番組と違うところは、全国放送の番組が地方の局でも同時に中継されているということと、地方局に同時中継の申し入れが求められたことである。本稿でも述べたように、競わせるように名乗りを挙げさせることで、帝国放送指導部が各地の放送局を強力に統括するシステムがあったことを垣間見せている。

帝国放送指導部に事前に放送内容が報告されるという手続きは、ラジオの番組誌に提供する情報収集というだけでなく、コンテンツのチェックという機能もあわせ持っていた。開戦直前のショパンの作品の放送禁止の指令はそうした事例の一つで、ポーランドという国民性が音楽を通じてイメージされることが問題だった。そして、方針に逸脱した行為があった場合には、1939年12月の帝国放送シュトゥットガルト局の例が示すように、放送内容について再考するように指示も出された。また、開戦当日の朝に行進曲や軍歌の放送が実施されたことにも、やみくもに音楽を流すのではなく、帝国放送指導部によるチェック体制が機能し、その時流にふさわしい「演出」が行われていたことを示している。ベルリン・フィルの演奏曲目の作品の傾向に栄光ある勝利と英雄崇拜の志向が認められることも、時流の影響なしには考えられないことである。これらの事例は、戦争が進む中で、その場の雰囲気づくりに音楽を活用してゆくことの先例となったように思われる。例えば、独ソ戦が始まり、ドイツ軍が大敗を期した1941年に、放送用に録音されていたモーツァルトの《レクイエム》がゲッベルスによって放送が禁じられた。ヒトラーの判断のミスが音楽を通じて感じ取られること、そしてそれが国民の士気高揚にマイナスになる要素があるとされたためである⁸⁵。

ラジオが音楽放送を盛んに放送することは、ドイツ国内における音楽をめぐる言説にも大きな影響をもたらした。既に見たように、開戦の後も、コンサートやオペラの公演は、通常通りに行われていた。しかし、戦争開始という国家の有事に際して、芸術活動が行われていることに厳しい目を向ける人も少なくなかったようだ。1939年9月13日に刊行された『ジグナーレ』の冒頭では、編集主幹のリヒャルト・オーレコプフが、戦争の開始という「ドイツ国民の未来

について決定を下さなければならない重大な時」に、「音楽に考えを向けることは、我々にとってあまり重要ではないという考え」を抱く人が数多くいることに注意を向ける。しかし、次のように反論する。「けれどもまさに音楽芸術こそが、いま、倫理的で崇高な力の証明を示すのであり、全力で芸術とその理念を保持する者の働きが魂の抵抗力を保持するための義務ともなるのである」と。彼によると、音楽芸術のこうした役割に対して模範的に「文化的使命」を全うするのがラジオだという。帝国放送指導部が予定された番組をすべて変更し、「音楽と現在の出来事との関係に関連性をもたらした」ことは高く評価できるといっているのである⁸⁶。

『フォルクスフンク』に掲載された無記名の記事も、戦時における音楽とラジオが高い可能性を持つことを指摘している。その要点はこうである。戦時下においても音楽の役割は減じることはなく、むしろ行進曲などの軍楽、クラシック音楽、民謡が、それぞれの特質を生かして戦争に貢献できる。軍楽は集団の規律をもたらすとともに、戦時の突撃や死の恐怖に打ち勝つ精神を養う。クラシック音楽は、秩序、力強さ、正確さ、慎重さ、神聖なものを感じさせ、精神を豊かにしてくれる。民謡は、素朴な形で愛、戦い、苦悩、慰めをもたらす。子供のころから親しみ、人生の最後の時まで忘れることがなく、幾世代を経ても「真に崇高な連帯」を作り出す。そしてここに各々は自分たちの運命が歌われていること、さらにそれが民族の運命と分かちがたいものとなっていることを感じることになる。ラジオはこれらの素晴らしい音楽を放送してくれる。それは兵士にとっては故郷から直接的に届けられることで勇気をもたらす贈り物となる、というのだ⁸⁷。

こうした言説が、番組制作に関与していたゲッベルス率いる宣伝省の指示として出されてきたものか、あるいは上層部への忖度から言われてきたものであるか、確認することは難しい。いずれにせよ、ラジオを通じて流される音楽が戦争との関わりで意味付けられることにより、音楽の存在意義が現実的なリアリティーから捉え直される環境が出来上がったことは看過できないだろう。音楽はナチス・ドイツの崩壊まで戦争を精神的に支えるツールとして欠くべから

ざるものとなり、ラジオの音楽番組もその一役を担うものとなったのである。

*本稿は、日本学術振興会の科学研究費補助金・基盤研究Cの採択課題「指揮者C・クラウスとナチス・ドイツ時代のラジオ番組制作に関する実証的研究」(研究課題番号:17K02378, 研究期間は2017～2020年度の予定)による研究成果の一部である。

注

- 1 ロジャー・ムーアハウス (高儀進訳) 『戦時下のベルリン——空襲と窮乏の生活1939-45』(白水社, 2012年), 30-31頁。ムーアハウスが引用した回想録は、次のものである。Günter Grossmann: Die sieben mageren Jahre eines jungen Berliners. Erinnerungen an den Zweiten Weltkriegs. Berlin (Frieling-Verlag) 2005, S. 9. グロスマンの回想では、1939年9月1日は日曜日とされているが、正しくは金曜日である。
- 2 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 11. 7. 1939, S. 1.
- 3 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 1. 8. 1939, S. 1.
- 4 Bundesarchiv (BA). R78/428. Nagel (RS Breslau-Programmverwaltung) an DS-Programmverwaltung, 9. 8. 1939.
- 5 BA. R78/430. Werchner (RS Stuttgart) an Kiepsch (Reichssendeleitung) und DS-Sendeleitung, 11. 8. 1939.
- 6 BA. R78/431. Schleussinger (RS Hamburg) an Apitsch (Reichssendeleitung), 12. 8. 1939.
- 7 BA. R78/431. Dr. Diettrich an Röhr (RS Breslau-Sendeleitung), 12. 8. 1939.
- 8 BA. R78/432. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten und die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders, des Landessenders Danzig, des Deutschen Kurzwellensenders, 14. 8. 1939.
- 9 BA. R78/437. Hausdorf (RS Breslau-Programmverwaltung) an DS-Programmverwaltung, 19. 8. 1939.
- 10 BA. R78/438. Roehr (RS Breslau-Sendeleitung) an die Reichssendeleitung, 21. 8. 1939.
- 11 BA. R78/432. RS Wien-Sendeleitung an die Reichssendeleitung, 14. 8. 1939.
- 12 BA. R78/433. Hacht (RS Königsberg) an die Reichssendeleitung, 15. 8. 1939.
- 13 BA. R78/433. Moeller (RS Leipzig) an die Reichssendeleitung, 15. 8. 1939.
- 14 BA. R78/434. Moeller (RS Leipzig) an die Reichssendeleitung, 16. 8. 1939.
- 15 BA. R78/436. DS-Sendeleitung an die Intendanz der Reichssender Leipzig, Wien,

Frankfurt, 18. 8. 1939.

- 16 BA. R78/437. Weber (RS Saarbrücken-Sendeleitung) an die Reichssendeleitung, 19. 8. 1939.
- 17 Das Kleine Radioblatt, 6. Jahrgang (1939), Folge 36, S. 10-11.
- 18 BA. R78/437. DS-Sendeleitung an Dr. von Eyb (RS München), 19. 8. 1939; BA. R78/438. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, den Intendanten des Deutschlandsenders, und die Intendanten der Reichssenders: Frankfurt, Hamburg, Königsberg, Leipzig, München, Saarbrücken, Stuttgart, Wien, Böhmen, Breslau, des Landessenders Danzig, 21. 8. 1939. 8月17日の案は、当日の文書が残されていないため、8月21日の文書によって確認した。
- 19 BA. R78/440. Apitzsch (Reichssendeleitung) an die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders, des Landessenders Danzig (ohne die RS Köln und Berlin), 25. 8. 1939.
- 20 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 16. 8. 1939, S. 7.
- 21 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 24. 8. 1939, S. 2.
- 22 Edda Fuhrich und Gisela Prossnitz: Die Salzburger Festspiele, Bd. 1, Salzburg und Wien (Residenz Verlag) 1990, S. 260-261.
- 23 Clemens Hellsberg: Demokratie der König. Die Geschichte der Wiener Philharmoniker, Zürich (Schweizer Verlaghaus) 1992, S. 464.
- 24 Fred K. Prieberg: Kraftprobe. Wilhelm Furtwängler im Dritten Reich, Wiesbaden (Brockhaus) 1986, S. 362; Herbert Haffner: Furtwängler, Berlin (Parthas Verlag) 2006, S. 273. プリーベルクは、ニュルンベルクの党大会におけるヒトラーの演説の前に、フルトヴェングラーの指揮によってグルックの《アウリスのイフィゲニア》序曲とベートーヴェンの交響曲第5番《運命》が演奏されることになったと告げるボルマンからローゼンベルク宛の文書（1939年7月25日付）に着目している。フルトヴェングラーが同年の党大会の前夜祭に上演される《マイスタージンガー》を指揮することが決まったということに関しては情報の典拠が示されていないが、この7月25日付の文書から状況を推察したものと思われる。ただし、先に本稿において示したように、同年8月1日に『フェルキッシャー・ベオバハター』において発表された《マイスタージンガー》の指揮者は、クラウスだった。
- 25 Fred K. Prieberg, a. a. O., S. 359f.; Clemens Hellsberg, a. a. O., S. 468-470. フルトヴェングラーとゲッベルスの会談は、ヘルスベルクは8月2日、プリーベルクは8月11日としている。
- 26 Josef Goebbels: Die Tagebücher. Im Auftrag des Instituts für Zeitgeschichte und mit Unterstützung des Staatlichen Archivdienstes Rußlands. Hrsg. von Elke Fröhlich, München u.a. (K.G.Saur) 1993-2008, Teil I, Bd. 7, S. 68. ドレヴェスがウィーン・フィルを指揮したことで批判されていたことは、同年8月19日のゲッベルスの日記にも記述がある。Vgl. Ebd, S. 69.

- 27 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 27. 8. 1939, S. 1.
- 28 イアン・カーショー (福永美和子訳, 石田勇治監修) 『ヒトラー 下——1936-1945 天罰』 (白水社, 2016年), 244 ~ 247頁。
- 29 BA. R78/439. Glasmeier (Reichsintendant) an alle Reichssender, 22. 8. 1939.
- 30 BA. R78/439. Raskin (Reichssendeleitung) an die Intendanten aller Reichssender, Deutschlandsender, Berlin und KWS, 22. 8. 1939.
- 31 Konrad Müller: Polen und die Musik. In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 41/42 (11. Oktober 1939), S. 494.
- 32 Robert Schumann: Gesammelte Schriften über Musik und Musiker, Leipzig (Georg Wigand's Verlag) 1854, Bd. 1, S. 280.
- 33 シューマンのショパン理解については, 拙稿「革命への憧れ——ローベルト・シューマンのショパン批評「作品Ⅱ」の成立をめぐる試論——」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第52輯第2分冊, 2007年2月, 157-167頁)を参照されたい。
- 34 Robert Schumann: a. a. O., Bd. 1, S. 279.
- 35 BA. R78/441. Stuckart (Reichssendeleitung) an Dr. Habersbrunner (Intendant des RS München), 27. 8. 1939; BA. R78/442. Stuckart (Reichssendeleitung) an den Intendanten des RS München, 30. 8. 1939.
- 36 一例をあげれば, 1939年8月13日にザルツブルク音楽祭で行われたクレメンス・クラウス指揮ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団のヨハン・シュトラウス・コンサートは, プレス用のヴァックディスクが作成され, ハノーファーのドイツ・グラモフォン社に送付される手筈になっていた。BA. R78/432. Koch (Deutschlandsender-Sendeleitung) an Maywald (RS Hamburg-Sendeleitung), 14. 8. 1939.
- 37 Hans Jaklitsch: Die Salzburger Festspiele Bd. 3. Verzeichnis der Werke und der Künstler 1920-1990, Salzburg und Wien (Residenz Verlag) 1991, S. 47.
- 38 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 2. 9. 1939, S. 9.
- 39 Das Kleine Blatt, 24. 11. 1939, S. 22.
- 40 BA. R78/442. Schroeter (RS Leipzig) an Ganss (Reichssendeleitung), 31. 8. 1939. この文書によると, 6時から放送されたのは以下の16曲である。Josef Neuhäuser: Westerwald-Marsch, Franz Luebbert: Helenen-Marsch, Carl Latann: Admiral Stosch-Marsch, August Reckling: Jägermarsch, Kral: Brucker Lagermarsch, Heinrich Blankenburg: Kämpfend vorwärts, Meissner: Im Gleichschritt, Hans Bund: ? (曲目不明), Meissner: Zum Städtle hinaus, Heinrich Blankenburg: Ruhm und Ehre, Georg Freundorfer: Gruss an Obersalzberg, Paul Höffer: Junges Blut, frischer Mut, Jakob Christ: Um den Lorbeer, Adolf Schneider : Durch Wolken, Wind, und Wetter, F. Schmidt-Hagen: Ins blühende Land, Hermann Schmidt: Panzerreiter-Marsch. 7時10分からの番組は, 以下のとおりである。„Die Wehrmacht singt (65) – O wie schön, Soldat zu sein.“ Ausgeführt von der 5. Batterie eines artillerie-Regimentes

(Leitung: Gerhard Pallmann). Werke: „Lippe Detmold“, „Reicht, ihr Lieben, mir die Hand“, „Jetzt müssen wir marschieren“, „Was braucht der Soldat“, „Die Vidette (durch Gebüsch und Nebelschleier)“, „Die Pacht spannt ihren Schleier“, „Ein Reiter kam geritten“, „Es ist stille Nacht“, „Auf der Heide blüht ein kleines Blümelein“, „Es ist so schön, Soldat zu sein“.

- 41 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 42 BA. R78/442. Pfaff (RS Leipzig) an Ganss (Reichssendeleitung), 31. 8. 1939.
- 43 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 44 Jörg Clemen: Musik am Reichssender Leipzig. In: Thomas Schinköth (hrsg.) : Musikstadt Leipzig im NS-Staat. Beiträge zu einem verdrängten Thema, Altenburg (Verlag Klaus-Jürgen Kamprad) 1997, S. 354f. この研究においては、論者の見解の裏付けとして極めて重要な開戦当日の早朝の番組には触れられていない。本稿で取り上げた1939年8月31日の文書の存在は把握していなかったと思われる。
- 45 BA. R78/442. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 31. 8. 1939.
- 46 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 35 (Woche vom 27. August bis 2. September 1939).
- 47 Hans Bausch (Hrsg.) : Rundfunk in Deutschland. Bd. 2 (Ansgar Diller: Rundfunkpolitik im Dritten Reich), München (Deutscher Taschenbuch Verlag) 1980, S. 300.
- 48 後述するベルリン・フィルの番組は、放送日の前日に配信された文書に記されている。
- 49 Der deutsche Rundfunk, 17. Jahrgang, Heft 37 (Woche vom 10. bis 16. September 1939)
- 50 Kleine Volks-Zeitung, 4. 9. 1939, S. 6; Kleine Volks-Zeitung, 5. 9. 1939, S. 12.
- 51 『クライネ・フォルクス・ツァイトゥング』では、1939年9月6日から番組表の掲載が停止されているが、9月24日は当日の番組が紹介された。番組表の掲載が再開されるのは、1939年10月2日からである。
- 52 Neues Wiener Tagblatt, 6. 9. 1939, S. 6; Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 6. 9. 1939, S. 9.
- 53 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 25. 9. 1939, S. 5.
- 54 Edda Fuhrich und Gisela Prossnitz, a. a. O., S. 266.
- 55 Fritz Stege: Berliner Musik. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 10 (Oktober), S. 1048.
- 56 Österreichische Nationalbibliothek. Musiksammlung. F59 Clemens Krauss Archiv

- 158/1-3. Clemens Krauss: Dirigir-Daten (Manuskript). 同資料の複写に際しては、同館音楽コレクションのアンドレア・ハラント博士 (Dr. Andrea Harrandt) にご配慮をしていただいた。感謝申し上げます。
- 57 Misha Aster: „Das Reichsorchester“. Die Berliner Philharmoniker und der Nationalsozialismus, München (Siedler) 2007, S. 222.
- 58 Musik im Rundfunk. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 10 (Oktober), S. 1080.
- 59 Musik im Rundfunk. In: Zeitschrift für Musik. 106. Jahrgang (1939), Heft 11 (November), S. 1136.
- 60 BA. R55/247. Bericht des künstlerischen Leiters über die Spielzeit 1939/40.
- 61 BA. R78/444. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 10. 9. 1939.
- 62 Misha Aster, a. a. O., S. 222.
- 63 BA. R78/445. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 12. 9. 1939.
- 64 この音源はドイツ放送アーカイブ (Deutsches Rundfunkarchiv, 以下 DRA) に残されている。これに基づく CD に以下のものがある。Wilhelm Furtwängler: Previously Unpublished Historic Recordings 1939-1944. Tahra. FURT-1014/15. (P) 1997.
- 65 BA. R78/445. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 14. 9. 1939.
- 66 BA. R78/446. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 16. 9. 1939.
- 67 Salzburger Volksblatt, 18. 9. 1939, S. 5.
- 68 BA. R78/446. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 18. 9. 1939.
- 69 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 21. 9. 1939.
- 70 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 23. 9. 1939.
- 71 BA. R78/447. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die

- Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 25. 9. 1939.
- 72 Thomas Keilberth: Joseph Keilberth. Ein Dirigentenleben im XX. Jahrhundert. Wien (Apollon Musikoffzin) 2007, S. 60.
- 73 BA. R78/448. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 27. 9. 1939.
- 74 BA. R78/448. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 27. 9. 1939.
- 75 BA. R78/449. Apitzsch (Reichssendeleitung) an den Reichsintendanten, die Intendanten aller Reichssender, des Deutschlandsenders und des Deutschen Kurzwellensenders, 2. 10. 1939; DRA. K000590227 (Archivnummer 1931494). Tschaikowsky: Sinfonie Nr. 5 e-moll, op 64. Clemens Krauss (Dirigent), Berliner Philharmoniker, 3. 10. 1939 (Aufnahmedatum). DRA の音源調査に際しては、マリオン・ギルム (Marion Gillum) 氏とクリスティアーネ・プース＝ブライル (Christiane Poos-Breir) 氏にご助力いただいた。御礼を申し上げたい。
- 76 Völkischer Beobachter. Wiener Ausgabe, 29. 9. 1939, S. 5.
- 77 Misha Aster, a. a. O., S. 222.
- 78 Bayerisches Hauptstaatsarchiv (BayHStA). Intendanz der Bayerischen Staatsoper 1725. Maschat an das Berliner Philharmonisches Orchester, 20. 9. 1939. 同館の資料の閲覧と複写に際しては、ゲルハルト・フュルメッツ (Gerhard Fürmetz) 氏とマルクス・フラウエンロイター (Markus Frauenreuther) 氏にご助力を頂いた。心より御礼を申し上げます。
- 79 BayHStA. Intendanz der Bayerischen Staatsoper 1725. Clemens Krauss an das Berliner Philharmonisches Orchester, 24. 9. 1939.
- 80 この放送の様態については、注75で示した DRA の録音を参照した。この録音では、演奏の前後に、当日放送された女性アナウンサーによるコメントが収録されている。
- 81 ベートーヴェンの交響曲第5番は、戦局が悪化する最中に頻繁にラジオで流された作品である。例えば、1944年2月から開始されたラジオ番組シリーズ「ドイツの音楽の不滅の巨匠」の第1回でも、《運命交響曲》として放送された。この演奏を担当したのも、フルトヴェングラー指揮するベルリン・フィルだった。
- 82 Michael H. Kater: Die mißbrauchte Muse. Musiker im Dritten Reich, München (Europa Verlag) 1998, S. 341.
- 83 Willhelm Matthes: Was wird ….. aus den Konzerten, aus dem Musikunterricht und der Unterhaltungsmusik? In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 39/40 (27. September 1939), S. 477f.
- 84 Musik in dieser Zeit. In: Volksfunk, 9. Jahrgang, Folge 39 (24. September 1939), S.

11.

85 Misha Aster, a. a. O., S. 254.

86 Richard Ohlekopf: Das Musikleben geht weiter! In: Signale für die musikalische Welt, 97. Jahrgang, Nr. 37/38 (13. September 1939), S. 465.

87 Musik in dieser Zeit. In: Volksfunk, 9. Jahrgang, Folge 39 (24. September 1939), S. 4 u. 11.